

⇒ 論 説 ⇐

経路研究における二元対立と二面性：Garud & Karnøe（2001）をもとにして

曾 國 哲*

要 旨

本稿は、Garud & Karnøe（2001）をレビューすることにより、経路依存性と経路創造との「二元対立」を議論し、更に経路研究におけるメタ理論と研究者の立ち位置との「二面性」を明らかにするものである。経路依存性では、経路は、過去に発生した出来事の積み重ねとその積み重ねによって醸成される自己強化メカニズムにより徐々に依存的に形成してきた歴史的なプロセスと見做される。一方、経路創造では、経路は、起業家が主体的・再帰的に既存の経路構造から逸脱し、新しくかつ絶え間なく構築していく未来志向のプロセスであると考えられる。メタ理論とりわけ人間論に遡及すると、経路依存性は、客観主義・決定論に依拠する理論であるのに対し、経路創造は、主観主義・主意主義に依拠する理論であると捉えることができる。また、方法論からみれば、決定論的経路依存性では、人間アクターの主体性・主観性を排除し経路の歴史的形成を客観的に記述する研究方法をとる理論である。その際に、研究者は「部外者視点」に立って経路形成過程を客観的に記述する。一方、主意主義的な経路創造は、過去から現在、そして未来を繋げていく起業家の主体性を重要視する理論である。その時に、研究者は「内部者視点」に立って解釈主義的なケース・スタディやナラティブ・アプローチなどを通じて彼ら彼女らの体験を追体験する研究方法をとる。本論稿は、メタ理論に基づいて議論したこととして、経路依存性と経路創造とを再統合する重要な礎を提供するものである。

キーワード：経路依存性、決定論、部外者視点、経路創造、主意主義、内部者視点

* 新潟大学経済科学部・助教（tsengkc@econ.niigata-u.ac.jp）

Dualism and Duality in Path Study: Based on Garud & Karnøe (2001)

Kuo-Che Tseng*

Abstract

This article briefly reviews Garud & Karnøe (2001) to discuss the “dualism” between path dependence and path creation and to further clarify the “duality” between meta-theory and the researcher’s position in path study. In path dependence, path is regarded as a historical process gradually and dependently formed through accumulating past events and the self-reinforcing mechanism induced by those events. On the other hand, in path creation, path is seen as a future-oriented process newly and continuously constructed by active and reflexive entrepreneurs who want to deviate from the existing path structure. Tracing back to meta-theory, particularly to human nature as one of the meta-theories, path dependence can be seen as a theory that relies on objectivism and determinism. In contrast, path creation is a theory that relies on subjectivism and voluntarism. From the discussion of methodology, deterministic path dependence is a theory taking the research method that objectively describes the historical formation of paths but eliminates the reflexive actor’s subjectivity and agency. In this case, the researcher is the “perspective of outsider” objectively describing the path formation process. Conversely, voluntarist path creation is a theory emphasizing the reflexive entrepreneur’s agency connecting the past to the present and to the future. Thus, the researcher plays the role of the “perspective of insider” taking a research approach that re-experiences the experiences of those entrepreneurs, such as subjectivistic case study or narrative approach. As a meta-theoretic discussion, this article provides an essential cornerstone for re-integrating path dependence and path creation.

Keywords: Path dependence, Determinism, Perspective of outsider, Path creation, Voluntarism, Perspective of insider

* Assistant Professor of Faculty of Economic Sciences at Niigata University, Japan.
Email: tsengkc@econ.niigata-u.ac.jp

1. はじめに：経路研究について¹

経路とりわけ経路依存性は、1980年代に学術理論として誕生して以来、特定の経済構造や産業構造、組織構造などの関連研究領域で大いに引用されている (Durand & Vergne, 2010)。経路依存性は、タイプライターないしキーボード産業でQWERTY配列が如何に支配的な地位になったかを歴史的に記述したDavid (1985) に遡ることができる。それ以来、経済現象や産業構造を研究する際に、その構造を形成した歴史的プロセスが重要な研究対象とされるようになった (David, 2001)。そうした歴史的プロセスがなぜ・どのように形成してきたかに関しては、「自己強化メカニズム」(self-reinforcing mechanism), 「ポジティブ・フィードバック」(positive feedback), 「収穫逓増」(increasing return) などがキーコンセプトとして詳述されている (Arthur, 1989; Arthur, 1990; Sydow & Schreyögg, 2013)。簡略に説明すると、経路の依存的な形成は、ポジティブ・フィードバックや収穫逓増などの機能を保つ自己強化メカニズムにより一つの方向に収斂し、最終的に一つの特定の構造または行動パターンにロックインするプロセスである (Sydow et al., 2009)。そうした自己強化メカニズムによるポジティブ・フィードバックと収穫逓増は、数学モデルのポリアの壺で説明されてもいる (David, 1985: 335)。

一方、経路創造は、経路依存性と概念上ほぼ同様でありながらも着目点としては正反対の学術理論としてGarud & Karnøe (2001) により提示されている。Garud & Karnøe (2001) では、経路依存性の諸概念に基づいていながらも、起業家精神の概念を組み込んで経路形成プロセスを議論している。経路創造の理解では、経路はもはや単に過去に発生した出来事の連鎖や積み重ねにより収斂して形成したプロセスではなくなり、既存の構造から意図的に逸脱しようとする起業家により構築されつつあるプロセスとみなされるようになった。その起業家は、様々な状況に応じて自らのアイデアを修正しながら (イナクトメント) 望ましい未来に向けて新しい経路を展開する人々である (Weick, 1979=1997; 高橋, 2009)。Garudらはさらに9年後、経路創造を「過去、現在、未来を貫く」理論だと詳細に定義した (Garud et al., 2010: 770)。

兄弟のような関係でありながらも、着目点として正反対の視点に立脚する上記の両理論を統合しようと試みる研究もあった (Sydow et al., 2012)。しかしながら、それは、経路依存性をベースにして構造化理論 (Giddens, 1984) を組み込んで再帰性のあるアクターを分析要素として入れただけで、実践研究上の解決策にしか留まっていまいと言わざるを得ない。言い換えれば、両理論の違いを議論するにせよ、両理論を統合するにせよ、実践研究上では検討されてはいるが、経路依存性と経路創造との本質の相違は未だ明確に議論されていないのである。²

¹ 経路という概念は産業や組織だけでなく、政治学や地域経済学など幅広く使われているが、本研究は組織や産業の経路を主要な対象として議論するものである。

² Sydow et al. (2012) では、Giddens (1984) の構造化理論に基づいて経路依存性と経路創造と統合して「経路構成分析」(Path constitute analysis) を提示しようとした。論文の最後の「結論と様々な方向」では、彼らは「構造化理論自体に対する批判に沿って、我々が描いたもの以外の観点の側面を統合することによって理論的アプローチを増強することは有益であるかもしれない、(後略)」と今後の経路統合研究の方向性を具体的に提示

上述した経路依存性と経路創造との関係を背景として、本稿は、経路創造の重要論文である Garud & Karnøe (2001) をレビューし、両理論の諸々の相違をメタ理論の諸概念に基づいて説明する。そうすることで、メタ理論上「二元対立」(Dualism) となっている経路依存性と経路創造とのそれぞれのメタ理論と研究者の立ち位置との「二面性」(Duality) を明確にすることもでき、メタ理論に根ざしてからの両理論の再統合に役立つ礎を提供することもできる。³

これから第2節では、Garud & Karnøe (2001) の経路創造をレビューしてから、経路依存性と経路創造との実践研究上の諸々の相違点を概観する。第3節では、Burrell & Morgan (1979) に基づいて経路依存性と経路創造とがそれぞれ暗黙的に依拠するメタ理論の諸概念を見る。第4節では、「二元対立」となっている経路依存性と経路創造とのそれぞれのメタ理論と研究者の立ち位置との「二面性」を詳細に議論する。最後の第5節では、本稿の結論と今後の発展をまとめて本稿を締めくくる。

2. 経路創造とは

2. 1. 経路創造の基礎概念

Garud & Karnøe (2001) は、「経路創造」(Path creation) をメイン・タイトルとしており、「心掛けての逸脱のプロセスとして」(As a process of mindful deviation) というサブ・タイトルを付している。彼らは経路創造を主要論点として議論しているが、経路依存性を完全に否定したわけではない。彼らが議論している通り、「起業家は既存の物体、関連の空間、並びに現在からの彼女らの逸脱程度が、経路創造が発生するために同期する必要があることを認識している。要するに、注意深い逸脱は、起業家たちを埋め込む構造から脱埋め込みすることを意味する」として既存の構造の存在は認められている (Garud & Karnøe, 2001: 6)。つまり、何もない宙から何かを作り出すという創造性を重んじるというよりも、むしろ人々が主体的なアクターとしてなぜ・どのように既存の構造から脱埋め込みすることができるかという逸脱性に論点を置いているのである。その概念に関しては、「経路創造は全体として三つの時間軸を意味している。つまり、経路という語で示されている『過去』、創造という語で示されている『未来』、経路と創造の両方の言葉を繋ぎ合わせる真ん中のスペースの部分としての『現在』」という彼らの9年後の議論においても詳述されている (Garud et al., 2010: 770)。そうした経路創造の主

した (Sydow et al., 2012: 173)。とりわけ「構造化理論自体に対する批判に沿って」に関して、彼らはArcher (1995 = 2007) を一例として挙げた。周知の通り、Margaret S. Archerは「批判的実在論」(Critical Realism) を存在論と認識論として社会構造と人間エージェンシーの相互作用を研究している有名な社会学者である。そうした社会構造と人間エージェンシーの相互作用を研究する際に、社会構造と人間エージェンシーのそれぞれがどのような存在であるか、それらの存在はどう認識されるかを理解する必要がある (Danermark et al., 2019: 74-76)、それはメタ理論ないしメタ理論としての人間論に遡って議論する必要がある (Burrell & Morgan, 1979)。

³ 本研究は、「二元対立」となっている両理論がそれぞれ暗黙的に依拠しているメタ理論と研究者の立ち位置との「二面性」を明らかにすることを主要な目的とするものであり、両理論の統合並びに再統合に関する議論は本稿では割愛する。

役は、脱埋め込みを主体的に実行する起業家たちである。その起業家たちは「単に経路依存的な社会的・制度的プロセスで既存の役割を遂行するのではなく、より新しい状態の創造に関わるイナクトメントの社会的・認知的プロセスにおいてより重要な役割を果たす」存在と考えられている (Garud & Karnøe, 2001: 7)。そのような起業家への認識は、「組織化」(organizing) で高名な組織学者の Karl E. Weick から影響を受けているのである (Weick, 1979=1997; 高橋, 2009)。言い換えれば、多義的な世界で行動を起こして環境に働きかけながら新しい情報を感知するという起業家のセンスメーカーのことである (Weick, 1995=2001; 高橋, 2012; 入山, 2019: 426-427)。

では、経路を主体的に新しく切り開く起業家たちは、なぜ・どのように振る舞うのだろうか。Garud & Karnøe (2001) では、3M 社の化学研究者である Spencer Silver が発見した「接着しない接着剤」(the glue that did not glue) から Post-it までの開発と普及を事例として詳述している。Garud & Karnøe (2001) では、Post-it の事例を通じて経路創造を成し遂げる起業家たちが中心となって果たす役割を下記の 9 つのポイントにまとめている。下記の 9 つのポイントには、時間的な順序があるかどうかに関しては明確に示されていないが、経路創造では「共進化」(co-creation) の概念が重宝されているため、ステップ・バイ・ステップというよりも、人々のアイデア・精神・行動が経路形成プロセスとともに進化していくという思惟の方が重要視されている。

● Mobilizing molecules

構成要素（原材料，商品，製品など）を活用して新しい探索を行うこと。

Post-it の開発事例では、Spencer Silver は 3M の化学研究者であるとして、体系的な実験を行うことができるだけでなく、異なるものを「偶然」見つけた際にその潜在的な価値を正しく評価することができたと考えられている (Garud & Karnøe, 2001: 12)。Garud & Karnøe (2001) は、とりわけイノベーション論の古典としての Schumpeter (1934) を引用して、そうした潜在的な価値を評価するプロセスは新しいものを作り出すために既存の諸資源を再構築する諸行為だと述べた。つまり、過去の経験を否定するというよりも、むしろそれらの既存の経験をもとにして物事を構築することによりイノベーションが生まれるのであり、それを実行するのは、起業家たちである。

また、経路創造の議論では、起業家たちは既存の構成要素から新しい組み合わせによりイノベーションを果たす存在だけではない。経路形成を成し遂げるために、既存の「局限された意味文脈」(localized contexts of meaning) から脱埋め込みする存在でなければならない点も指摘している (Garud & Karnøe, 2001: 13)。

- Mobilizing minds

アイデアを修正するとしても粘り強く継続し「韌性」の精神を発揮すること。

既存の意味文脈から脱埋め込みするにあたっては、多くの場合、良くて無関心、悪くて抵抗に遭遇する。例えば、Silverは「接着しない接着剤」の価値を見込んで3Mの特許申請をしたが、2回も拒絶され、しかも2回目の返信では「この申請拒否は最後だ!」と拒まれた。それにもかかわらず、Silverは「私はこれが新たなものであることを知っている。今までこのようなものを見たことがない。我々はただ、これが一体どのようなものかについて審査官を説得できていないだけだ」と確信していた (Garud & Karnøe, 2001: 13)。

この信念を持ち、Silverは「ドア・ツー・ドア」(door to door)の形で彼の話聞いてくれそうな他の技術責任者、科学者、技術グループを尋ね歩き、「接着しない接着剤」から価値のある製品を開発するために協力を仰いだ。Silverは彼ら彼女らの意見を聴取し、自分のオリジナル・アイデアが修正されるとしても、自分のアイデアを補完するような問題や解決策を探っていく体制を整えた。Garudらでは、その精神上的「柔軟性に伴う粘り強さ」(persistence with flexibility)は「韌性」(tenacity)と称している (Garud & Karnøe, 2001: 14)。

- Boundary spanning

社会的な起業家スキルを発揮し多くの人々を巻き込むこと。

既存の境界線を超えて起業家プロセスを果たすために、起業家たちは意味的な「翻訳」(meaningfully “translated”)をしなければならない。成功的な翻訳プロセスは「一つの共有空間」(a shared place)を作ることができ、適切な未来図を喚起して他者を効果的に巻き込むことができる (Garud & Karnøe, 2001: 14)。そうした翻訳により作られた共有空間では、そのアイデアをめぐる「クリティカル・マス」(critical mass)を動員し賛同者を生み出すためのベースをも生成する (Garud & Karnøe, 2001: 15)。つまり、起業家プロセスは、誰か一人の天才が狭い自己利益の追求のために勝手に作り出すものではなく集合的な事業であり (Xia & Donzé, 2021)、その事業に関与している人々の様々な意味から派生するコミュニティーにより創出・育成されつつある共有空間である。

Garudらでは、Silverは技術的センスに長けている技術的起業家だけでなく、バウンダリー・スパーナーとして熟練した社会的起業家と高く評価されている (Garud & Karnøe, 2001)。「韌性」の精神を持ち意味論的な翻訳作業を展開する起業家的プロセスにおいて、起業家たちはたとえ自分のアイデアが修正されるフィードバックを受けたとしても、信念を持って他者に自分のアイデアを継続的に提示する能力を持つ存在でなければならない。

- Generating momentum

多くの人々を巻き込み起業家精神のプロセスの動力を生成すること。

Post-itの事例では、Silverが最初の支持者としての科学者仲間のBob Oliveiraを説得した後、

「接着しない接着剤」の経路創造プロセスは勢い付き始めた。彼らは最初にその弱い接着剤を社内掲示板で使ってみたが、その弱い接着剤が発見されて10年後の1974年に Art Fry という同じく3M社の科学者は、その弱い接着剤のより良い使い方を偶然の出来事で発見した。Fry は教会堂合唱隊のリハーサルの時にいつも歌集につけたマークを見失っていた。そこで彼は Silver たちの弱い接着剤を紙片に塗って歌集に貼って「一時的に耐久性のあるブックマーク」(a temporarily permanent book mark) を作ることで問題を解決した (Garud & Karnøe, 2001: 16)。

Fry などのような支持者が加入したとしても、Silver たちは脱埋め込みの起業家的サイクルにおいて「翻訳作業」、「精神の活用」、「構成要素の活用」を何度も繰り返していた。「接着しない接着剤」の価値が本当に評価され始めるまでは、多くの関連人物に価値を伝えたり、それらの関連人物から得たフィードバックに基づいてアイデアを修正していたりする作業が絶え間なく続いていた。経路創造の議論では、起業家的プロセスでは「洞察の行為」(acts of insight) が起こり、その後必ず「批判的修正」(critical revision) がついてくる。そうした「批判的修正」に遭った後、起業家たちは別の諸問題や諸機会を新しく「理解」する (perceive) ことにより、オリジナル・アイデア自体が実現可能か、修正すべきか、それとも放棄すべきかに気づくようになる (Garud & Karnøe, 2001: 16)。

- Co-evolution of minds and molecules

機会を掴むために製品とプロセスを共進化させること。

Post-it の事例では、Fry が掲示板での弱い接着剤の使い方を取りやめ、直接に紙に応用したとして、彼らはアイデアを消滅させるのではなく「偏向」(deflect) させたのである (Garud & Karnøe, 2001: 16-17)。経路創造の概念では、意味解釈の変化は物事を構成する要素への解釈だけでなく、さらにそれらの要素の組み合わせに変化をもたらすのである。

このような精神と構成要素の共進化には、柔軟な精神と柔軟な構成要素が必要である。構成要素に伴う柔軟性は、経路創造プロセスを実行する際に「チャンク化」(chunking) することによって得られるものである。チャンク化について、Hatch (2013=2017: 8) では「チャンク化は、抽象化によって抽出された知識の大きな塊を操作していくつかの概念に変えることを可能にする」と詳述されている。チャンク化することにより、起業家たちは「異なるタイミングで異なる背景の人々と小さく断片化された意味を共有する機会」(an opportunity to share different chunks with different people at different points in time) を得られ、主要なステークホルダーの新たな好みを生み出すことができる (Garud & Karnøe, 2001: 17)。特定のチャンクを様々な社会集団と共有しそこから戻ってくるフィードバックは、その構成要素の組み合わせを適正に調整し、どのチャンクを継続し、どのチャンクを放棄するかを決める判断基準を提供してくれる。

一方、起業家精神の共進化プロセスは「制御不能」(spinning out of control) のフィールドを探索する仕組みでもある。様々な関連人物が持つ意味解釈による相互作用のため、複雑なシステムが管理不能なプロセスを生み出し、予期せぬ、受け入れがたい最終状態に突入する恐れが

ある。その際、起業家たちは全体的なアーキテクチャの中心に位置し指揮を執り、技術や概念などをチャンク化することを通じて、潜在的に混沌としたプロセスをよりよくコントロールすることができる存在である必要がある (Garud & Karnøe, 2001: 18)。

- Virtuous cycle

更に多くの人々を巻き込んでアイデアに対する善なる連鎖を引き起こすこと。

Post-it のケースでは、協力してくれる 2 人のマーケティング担当は、そのアイデアを「翻訳」(translate) するために無料サンプルを他の関係者に提供した。Lew Lehr という当時の 3M 社の社長も参加し、Lehr は更に多くの人々を引き込んだ (Garud & Karnøe, 2001: 18)。上述した通り、イノベーションの成果は誰か一人の天才に属するものではなく、むしろ時間と共に展開されつつあるプロセスに関与する人々全員に属するものである (Xia & Donzé, 2021)。言い換えれば、起業家精神は「人間エージェンシーを関係的な概念と考えた上で、集団的な事業または異質的な要素を翻訳して活用するプロセスのアウトカム」と認識されなければならない (Garud & Karnøe, 2001: 19)。

もちろん、そのプロセスでは、革新的なアイデアとその実物は、手から手へ、精神から精神へと修正されていながら進化していくものである。その際、経路依存性の理解とは異なり、偶発的な出来事はもはや単なる偶発的な出来事ではなくなる。それらの諸々の出来事は、計画され、待ち望まれ、洗練される一連の躍進とされるようになる。つまり、経路創造は「起業家が関連の局限された構造やそこに関連する意味から脱埋め込みする際に遭遇した慣性を克服し、時間をかけて変容しつつあるアイデアに取り組むために他人を動員し、可能性のあるビジョンとともに柔軟かつ毅然として行動する」プロセスである (Garud & Karnøe, 2001: 19)。

- Mobilizing time

時間はアイデアを未来に繋ぐために使われる資源とすること。

Post-it を含め、多くの起業家プロセスやイノベーションの展開は、一晩だけで現れるものではない。Silver たちの Post-it の開発・普及の事例を眺めると、12 年ほどかかったということがわかる。経路創造では、そうした起業家的プロセスは、歴史的に条件付けられた過去の諸々の出来事による自発的なものだけではなく、未来に向けて計画される時間の中で展開されるものと捉えるようになった (Garud & Karnøe, 2001: 19)。つまり、経路創造では、経路の展開は、完全に過去かつ客観的に発生した出来事に埋め込まれるのではなく、起業家精神をもつ人々が望む未来に向けて「過去と現在、そして更なる発展」に繋げていくプロセスであると捉えられている (Garud et al., 2010: 770)。よって、経路を研究する際に繰り返し出てくる重要なテーマの一つは、「時間を資源として統制する能力」(an ability to marshal time as a resource) の必要性に関する議論である (Garud & Karnøe, 2001: 20)。

● Time, timing, and temporality

一時的な試みの積み重ねと連鎖によってアイデアを実行すること。

上述した通り、経路創造では、時間は起業家にとって必要不可欠な資源と考えられている。また、無関心や抵抗に遭遇するとしても多くの人々を招くのは、起業家的プロセスで直面しなければならないことである。経路創造の議論では、「起業家的プロセスにとってのアウトサイダーたちは時間枠を少なくすることが多いゆえに探索する可能性が低いのに対し、インサイダーたちはより長い時間枠で作業し、探索活動を展開する」と詳述されている (Garud & Karnøe, 2001: 20)。その際に、バウンダリー・スパナーとしての起業家たちは、適切な「時間チャック」を活用しなければならない。つまり、起業家的プロセスの全体は、より小さな実験の一連の積み重ねとされなければならない。それらの諸々の小さな実験から戻ってくるフィードバックは、更なる支持者を募りながらオリジナル・アイデアを修正していく基盤構築として役立ち、ダウンサイド・リスク (downside risk) を減少し資源の無駄な投入を防ぐ機会を提供してくれる (Garud & Karnøe, 2001: 21)。

● Co-evolution of minds and molecules over time

起業家精神は最初から完全に設計されたものではなく、その代わりに彼ら彼女らの計画やビジョンは起業家的プロセスの中で部分として徐々に生まれてくるものであること。

この概念は、Garud & Karnøe (2001) の経路創造の諸概念を議論する最後の部分であり、まとめのパートと捉えることができる。「起業家の精神」(entrepreneurs' minds) は、初めから未来に対して詳細かつ揺るぎのないビジョンで充実したわけではない。対して、起業家たちが既存の構造からの「自分に対する埋没性を自覚」し (conscious of their embeddedness)、「意味論的な方法」(meaningful ways) で対処することによって、その埋没構造から脱出しようとして初めて、起業家的プロセスは徐々に顕在化してくる (Garud & Karnøe, 2001: 22)。

まとめると、起業家たちは、既存の埋め込み構造において新しいアイデアと出会い、そのアイデアの可能性を見込んで主体的・再帰的に動き出す存在である。彼ら彼女らは、粘り強く多くの人々を巻き込み、そこからフィードバックを得てオリジナル・アイデアを修正していく。そうした起業家的プロセスにおいて、彼ら彼女らの精神 (minds) と彼ら彼女らのアイデアを実体化した構成要素 (molecules) は、時間とともに進化していく。

以上のGarud & Karnøe (2001) の経路創造から、起業家たちは、受動的に構造に埋め込まれる受動的な存在というよりも、むしろそこから意図的に脱却し、新しい経路を主体的に切り開く存在であるということがわかった。また、経路形成プロセスは、もはや過去に発生した諸々の出来事の連鎖によって人間疎外的に形成してきた歴史的なプロセスではなく、起業家たちが主体的に既存の構造から脱却し新しい道を切り開くことによって絶え間なく構築されつつある未来志向のプロセスと考えられるようになった。

2. 2. 経路創造と経路依存性との実践研究上の相違

上記のGarud & Karnøe (2001) への簡単なレビューから、経路創造は既存の経路依存性に起業家精神の概念を組み込んでより新しく展開された理論であるということがわかった。Garud & Karnøe (2001) では、経路創造の諸概念を論じる前に、経路依存性と経路創造との相違をも議論している。

経路依存性では、経路形成プロセスは最初に小さな偶発的な出来事から発生し、様々な境界にいる消費者、製造者、レギュレーターなどの複雑かつ非線的な相互作用によりその効果が拡大し、最終的に支配的な標準が出現した歴史的なプロセスであると捉えられている (Garud & Karnøe, 2001: 4)。それらの相互作用は「ポジティブ・フィードバック」や「収穫逡増」をもたらす「自己強化メカニズム」として詳細に論じられており、具体的には「規模の経済」(economies of scale), 「ネットワーク外部性」(network externalities), 「学習効果」(learning effects), 「順応効果」(adaptive expectations), 「調整効果」(coordination effects), 「相補性効果」(complementarity effects) などが経路依存性研究の文献で挙げられている (Sydow & Schreyögg, 2013: 6-7)。言い換えれば、経路依存性は「経済的・技術的・制度的な力が生み出す特定の技術的軌道に関連する『粘着性』」を議論する理論である (Garud & Karnøe, 2001: 5)。その経済的・技術的・制度的な粘着性は、他の代替案を排除し、ロックインされた産業または組織を非効率にしてしまうのである (Sydow et al., 2009: 695-696)。例えば、日本の発電産業が原子力発電に強く依存しているというのは、1970年代のオイルショック及び1974年に制定された「電源三法」をきっかけとして収穫逡増し、そして「原子力ムラ」が存在しているからだと言われている。その「ムラ」にいる「住民」として、安定的な収入源を確保したい電力会社 (産)、支持を得たい政治家 (官)、企業から援助を得て原子力のポジティブな側面に光を当てる自然科学や社会科学の研究者 (学) 等々におけるポジティブな相互作用により、日本の原子力発電産業への強い粘着性が発揮されていると考えられている (Sydow et al., 2021)。日本の発電産業が原子力に強く依存しているのは、原子力ムラの間で「相補性効果」が発揮されているからであり、Herbert A. Simon が提示した「合成された意思決定過程」であるとも考えられている (厚東, 2013: 314)。

一方、Garud & Karnøe (2001) は、経路依存性によって引き起こされる産業や組織の非効率に関する既存の議論が起業家精神の基本的な側面を曖昧にしてしまうのだと考え、経路研究に起業家精神の概念を導入し経路創造を新しく展開している。彼らは「既存の経路構造からの逸脱行為による非効率性が認識されているにもかかわらず、起業家たちは新しい道を切り開くために既存の人工物やプロセスから意図的に逸脱する人々である」と提示している (Garud & Karnøe, 2001: 6)。本稿の前半から紹介してきた通り、Garud & Karnøe (2001) は、Spencer Silver たちの Post-it の開発と普及を実例として経路創造を具体的かつ詳細に議論した。

経路研究における「非効率性」への認識については、ここでより深く議論する必要がある。すでにロックインされている経路は、外部のより効率的なオルタナティブから見れば、膠着状態のため慢性的に非効率になっていくように見えるかもしれないが、経路に埋め込まれている

内部の人々またはその経路構造に入ろうとする新参者からすれば、むしろむやみに外部のオルタナティブに切り替えた方が非効率的に見えるのかもしれない。つまり、経路における効率性は、経路を見る立場の違いにより解釈も異なる。例えば、2007年に一台500ドルで発売されたアップル社のiPhone第一世代は、当時のマイクロソフト社のCEOのSteven Ballmerに「世界で一番高い電話です。キーボードがないので、仕事用に買う人はいないでしょう」と嘲諷された (Isaacson, 2011 = 2011II : 293)。当時のマイクロソフト社や他の携帯電話会社からすれば、当時の携帯電話市場ではキーボードがついており、なおかつそこまで高くない携帯電話の方が成功しやすかっただろう。逆にアップル社のような既存の携帯電話市場に対しての外側にある存在から見れば、音量ボタン、電源ボタン、ホームボタンの三つだけを残して他の全ての操作を滑らかなスクリーン画面上で行うというデザインのほうが直感的で使用者に優しいのであった。実際、iPhone第一世代の開発では、すでに大きな成功を収めた自社のiPodのように操作用ホイールをつけて使用者に操作させようというようなプランも提案されたが、それはあまりにも操作しにくいいため廃案された (Isaacson, 2011 = 2011II : 280)。

上述した両理論の諸々の相違点から、下記の通りそれぞれを具体的に捉えることができる。経路依存性は、個々人や各々の企業組織の存在を超えたところにある、いわゆる疎外化した力やメカニズム、構造などに焦点を当てる理論である。一方、経路創造は、既存の経路構造から脱埋め込みする主体性・再帰性のあるアクターに注目する理論である。つまり、経路依存性と経路創造との本質的な相違は、社会学ないし哲学における「構造 対 行為」という古くて新しき「二元対立」または「不幸な二元論」に陥っていると捉えても良い。⁴

3. メタ理論への遡り：研究者としての再帰的思考

3.1. 経路依存性と経路創造との存在論的・認識論的相違

経路依存性と経路創造との本質的な違いは、それぞれ暗黙的に依拠する認識論と存在論による違いである。経路依存性が歴史を過度に重んじる理論であるとして、経路依存をとる研究者は、現在の評価基準に根ざした結果性の論理を通じて経路形成プロセスを観察する「覗き込む部外者」(outsiders looking in) である (Garud & Karnøe, 2001: 8)。例えば、歴史をできるだけ客観的に記述する研究者や記録者などのことである。一方、経路創造では、新しい道を切り拓く起業家は、ある技術分野に精通しそこから何を逸脱してどのような価値を追求するかを理解している「内部者」(insiders) であると同時に、既存の関連構造からどのように逸脱できるかを評価する「外部者」(outsiders) でもある。そうした経路創造の理解においては、経路はそれらの外部と内部を「境界を跨ぐ」起業家の逸脱精神により絶え間なく作られつつあるプロセスと捉えられている (Garud & Karnøe, 2001: 8)。上述したiPhoneの開発事例では、Steve Jobs

⁴ 「不幸の二元論」(Unhappy dualism) について、Danermark et al. (2019: 2-4) をご参考ください。

はインターネット通信産業を理解している「内部者」であると同時に、電話、音楽、インターネット検索機能の三つをマルチタッチ機能のある滑らかなスクリーン画面に凝縮するという元々の業界内にないアイデアを持つ「外部者」でもあると捉えられる。⁵ また、iPhoneが発売された3年後の2010年にiPadはリリースされた。それはSteve Jobsを中心としてアップル社の開発チームが再び挑んだ、既存のパソコン業界からの一つ大きな切り拓きであったと考えて良いだろう。

一方、Sydow et al. (2009) は、組織論領域における経路依存性の定義、並びに如何に固定した経路から脱却すれば良いかを詳細に議論している。Sydow et al. (2009) では、ロックインされた経路が破壊される原因として、大災害や経済的または政治的な危機などの外因的なショックがあると指摘している (Sydow et al., 2009: 701)。例えば、2020年に入ってから新型コロナウイルスの世界的な大流行により、既存のライフスタイルやワークライフバランスなどが変貌し、リモートワークの活用も増えてきた (Birimoglu Okuyan & Begen, 2022)。また、Sydow et al. (2009) は「意図的に組織の経路をブレイクする」(Deliberately Breaking Organizational Paths) ためには、経営者は経路を強く維持している自己強化メカニズムを批判的な視点に立って観察し、揺さぶりをかける必要があるとも論じた (Sydow et al., 2009: 702)。例えば、組織文化は「比較的安定した特性から成り立っているため、変革することは難しい。そうした文化は長い年月をかけて構築されたものであり、従業員にとって礎となる確固たる価値観に根ざしている」のでありつつも、劇的な危機が存在する時やリーダーシップの交代、または小規模なサブ組織の新設などにより、既存の組織文化やその文化を維持する底流の価値観などに揺さぶりをかけることができ、文化の変革をもたらしすることができる (Robbins, 2005 = 2009 : 389-390)。

しかしながら、その「組織経路を意図的にブレイクする」は、Garudらが翌年に刊行した論文で「混合してしまう諸存在論」(mixing ontologies) と強く批判された。Garud et al. (2010) は、経路依存性と経路創造とが学術理論としてそれぞれの立ち位置があると詳細に述べている。経路依存性は「プロセスに完全に関与する時間や手段がないにもかかわらず、プロセスが悪循環に陥ったことを察知した場合に、その創発の種をまいたり介入したりしたいと考えている管理者や経営者」のための理論である。一方、経路創造は「誰も社会的・物質的な絡み合いの創発的生態系を完全に決定することができないことを知りながらも、リアルタイムで発展プロセスを形成しようと試みる関連人物」のためのものである (Garud et al., 2010: 770)。

3. 2. 両理論が持つアンバランス並びにメタ理論に遡っての再検討

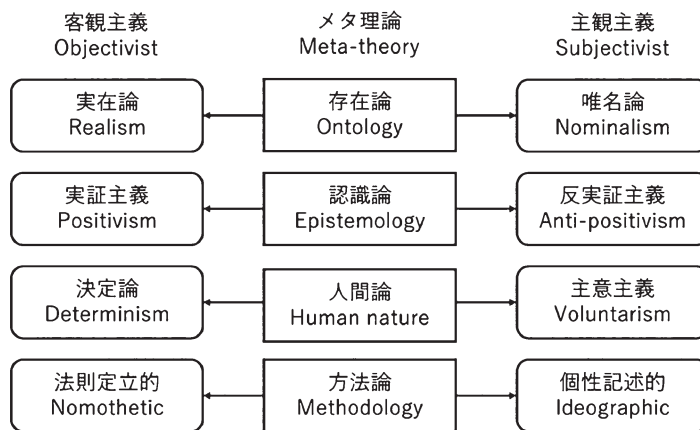
上記の経路依存性と経路創造に関する既存文献上の諸々の議論は、確かに我々を両理論のメタ理論や実践研究の相違に関する検討へ連れていってくれてはいるが、現状の議論では両理論

⁵ iPhoneが出る前にすでにマイクロソフト社やブラックベリー社などがスマートフォンを出しているが、小さいキーボードがついているほかに、小さいスクリーン画面で操作のペンもついているため、使用者に優しくないインターフェースだと、アップル社の開発チームに批判されていた (Isaacson, 2011 = 2011II : 281-285)。

に対する理解のアンバランスをも生じさせていると言わざるをえない。簡単に言うと、経路依存性を認識する研究者の立ち位置は詳しく説明されているが、研究対象とされる経路の中に生息する人々の存在に関してははっきりと議論されていない。一方、経路創造では、起業家的プロセスにおける主体性のあるアクター、つまり起業家たちは主役として詳述されるが、その経路形成プロセスを経路創造と認識する研究者の立ち位置はまだ明確に論じられていない。そうした経路依存性と経路創造とのそれぞれのメタ理論（経路そのものやその中にいる人々の存在やそれらの存在に対する認識など）と研究者の立ち位置（研究者が経路を研究する際にとる方法論と実践的研究手法）をバランスよく理解するためには、存在論と認識論はもちろんのこと、その上に同様にメタ理論としての人間論にも詳細に論及する必要がある。

メタ理論に関わる議論に関しては、Burrell & Morgan (1979) の客観主義と主観主義のパラダイム論を挙げて論じることができる。Burrell & Morgan (1979) では、存在論・認識論・人間論・方法論の四つのメタ理論的な基礎概念に基づき、社会学ないし組織論では客観主義と主観主義の二つの支配的かつ相互排他的なパラダイムが存在していると提示している（図1）。

図1 客観主義パラダイムと主観主義パラダイム



出典：Burrell & Morgan (1979: 3) に基づいて筆者作成

客観主義パラダイムでは、社会的世界のリアリティは人々の外部に実在するものだと捉えており、「实在論」の立場をとる。そうした存在論を前提として、客観主義の認識論は「実証主義」をとり、外部に実在する存在を客観的に実証する立場である。そうした客観・実証主義は、別文献では合理性、効率性、有効性の規範を重要視する「モダン・パースペクティブ」とも称されている（Hatch, 2013=2017）。客観主義パラダイムにおける構造と人間との関係は「決定論」であり、人々の行動や思考などは外部環境によって決定づけられる立場である。方法論としては、科学的厳密性の基準に従って規則性や普遍的法則などを実証し導出するという「法則定率

的」な立場である。

一方、主観主義パラダイムでは、社会的世界のリアリティは人々の創造物である「名辞」(names) やラベルによって構築されるものとして、「唯名論」の立場をとる。そうした存在論を前提として、主観主義の認識論は「反実証主義」または「解釈主義」をとり、それらの創造物を客観的に実証して何らかの法則や規則性を明確にするということを拒絶し、その代わりに諸個人の経験や認識に依拠する主観的な解釈を通じてしか理解しえないとする。そうした主観・解釈主義は、別文献では「シンボリック・パースペクティブ」とも称されており、社会の文脈や組織の構造がその諸構成員の意味の相互作用や連鎖などにより絶え間なく構築されるとされている (Hatch, 2013=2017)。主観主義の人間論では、人々が自立的に自由意志を備える「主意主義」をとり、方法論としては「個性記述的」な立場に立って初めて社会的世界のリアリティを理解し、記述することができるようになる。

3.3. 決定論的経路依存性 対 主意主義的経路創造

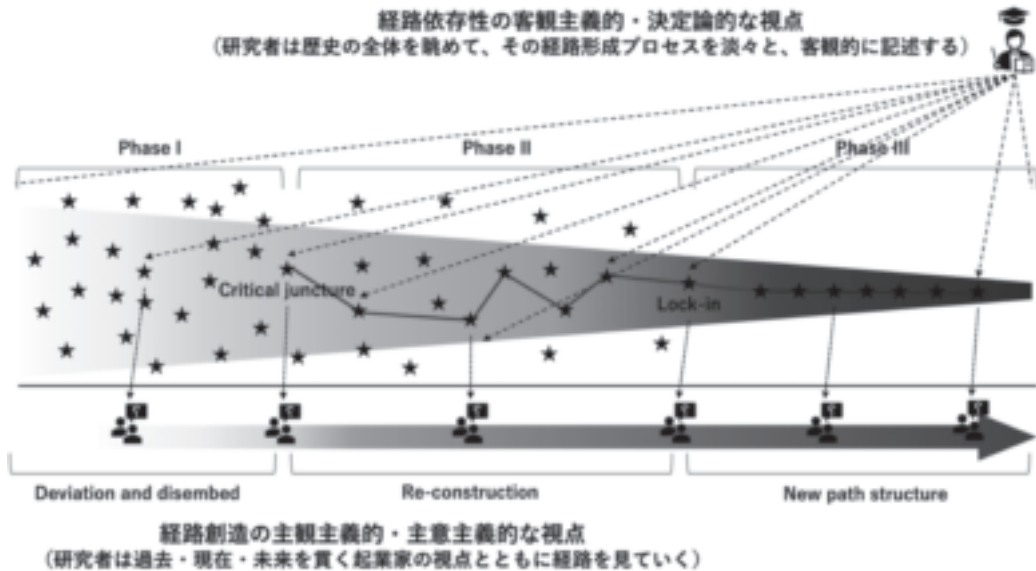
経路依存性と経路創造とのそれぞれのメタ理論並びに研究者の立ち位置を明確にするために、本論稿では、とりわけメタ理論の一つとしての人間論をピックアップして経路形成プロセスとその中にある人々との関係を考察する (図2)。これまで見てきた経路依存性の定義では、経路形成プロセスは、最初に小さな偶発的な出来事の発生により発足し、「自己強化メカニズム」により徐々に形成され、最終的に特定のパターンにロックインするという歴史的なプロセスである。その「自己強化メカニズム」は、組織内または産業内の諸々の関連人物間の相互作用によって駆動されているが、誰一人も制御することのできない、一種疎外化した力であると考えることができる。メタ理論の議論に基づいて検討すれば、経路依存性は、暗黙的に客観主義、とりわけ決定論を人間論とする理論と捉えることができる (図2の上半分)。

一方、経路創造の定義では、経路形成プロセスは、起業家が多くの関連人物を巻き込み、可能性のあるアイデアを修正・育成し、既存の構造から逸脱して新しい道を切り開くことによって絶え間なく構築されつつある未来志向のプロセスである。そうした起業家は、過去に構築された構造に埋め込まれていながらも望む未来に向けて主体的・再帰的に動く存在であると注目されている。よって、決定論的経路依存性に対して、経路創造は、メタ理論上暗黙的に主観主義、とりわけ主意主義を人間論とする理論と捉えても良い (図2の下半分)。

メタ理論とりわけ人間論に遡って考察することにより、上述した「混合してしまう存在論」という興味深い批判は、下記の通りに捉えることができる。その批判は、メタ理論としての人間論への深掘りをせず、決定論に暗黙的に依拠する経路依存性の上に、主体性・再帰性を持つはずの人々の能動性を、経路破壊を議論する際だけに無理矢理に付け加えることに対する批判と捉えても良いだろう。また、本稿のはじめにで挙げた両理論の統合論文 (Sydow et al., 2012) についても同様である。つまり、メタ理論上「二元対立」となっている両理論を、メタ理論に基づいての議論をせずに統合してしまったことで、両理論の本質的な相違まで遡れず、

実践研究上の議論にしか止まっていないと言わざるを得ない。

図2 決定論的経路依存性と主意主義的経路創造のそれぞれの視点



出典：Sydow et al. (2009) とGarud et al. (2010) に基づいて筆者作成

4. 議論：経路研究にける「二元対立」と「二面性」

これから経路研究にける「二元対立」と「二面性」について議論していく。メタ理論上「二元対立」となっている両理論のそれぞれの「二面性」を議論することにあたっては、上述した経路研究における「部外者」と「内部者」が経路構造やその中にいる人々をどのように認識するかを、メタ理論とりわけ人間論に基づいて深掘りすることは重要な手掛かりとなる。そうすることにより、両理論のメタ理論と研究者の立ち位置をバランスよく把握することができる。

Garud & Karnøe (2001) の議論では、経路を依存的に形成した歴史的なプロセスとみなす人々は「覗き込む部外者」とされている。言い換えれば、経路形成プロセスを経路依存性だと認識する研究者は、今現在の時空間に立って過去を振り返って眺めるというような視点に立脚する。まるで経路の中に「人間がない」かのように、もしくはその中の人々はひたすら時代の前進に推し進められてしまうような受動的な存在であるかのように捉え、そうした認識を持つ研究者は、その歴史の流れや出来事の積み重ねをそのまま記述するだろう（図2の上半分）。

決定論的経路依存性の方法論としては、過去に発生した出来事の積み重ねを客観的に捉え、実証的に分析・記述する方法をとるのが一般的である。実践的な研究手法として、シミュレーションや実験などが挙げられてはいるが（Durand & Vergne, 2010）、ケース・スタディを導入

するとしても「過去に死んだ」事実を歴史的事実として「歴史法」とオーバーラップして考察を行うと考えられる (Yin, 2003: 7)。仮にインタビュー調査を実施しようとしても、佐藤 (2006) が提示した「さまざまなタイプのインタビュー」の中の「一問一答の質問-対応する『回答』」または「構造化された質問-対応する答え」という狭い意味でのインタビューが実行される。もしくは「オープンエンドな質問」に従って質的データをとるが、意味論的な解釈の記述を深掘りせず客観的に分析・記述する可能性が高く、研究者が客観的かつ「部外者」のように、観察した諸事件及びその積み重ねをそのまま淡々と記述するのである (佐藤, 2006: 196)。

一方、経路創造では、研究対象としての起業家は、どのような新しい価値を追求するかを理解している「内部者」であると同時に、既存の関連構造からどのように逸脱できるかを評価する「外部者」であると指摘されている。繰り返しになるが、それらの起業家たちは、完全に受動的に埋め込まれる存在ではなく、主体的に未来に向けて資源を戦略的に操作したり状況を判断したりして新しい道を切り開く存在として大いに注目される。経路と起業家との関係を経路創造だと認識する研究者は、現場の人々と「一緒に」経路を構築していくような観察者として、過去から現在、そして未来を繋げていくというような形で経路形成プロセスを記述していくと考えることができる (図2の下半分)。

主意主義的経路創造では、アクターの主体性・再帰性を前面に提示し、彼ら彼女らの意志や意味解釈をきっちりと記述するのを方法論として考えることが重要である。その際に、解釈主義的なケース・スタディ、参与観察、オーラル・ヒストリー、またはナラティブ・アプローチなどが実践的な研究手法として挙げられうる。極端に言えば、変数調整で経路形成プロセスを客観的にテスト・記述しようとするというよりも、むしろ個性記述的な方法論を通して現場の人々の意味や発想、それに基づく活動などを厚く記述することこそ、現場をより「客観的」かつ鮮明に記述することができるのではないかと考えられている (Garud et al., 2010: 767)。「さまざまなタイプのインタビュー」の中の「現場の流儀・約束事に対する質問-それに対するアドバイス (教え)」または「会話・対話」が具体的な研究手法とされ (佐藤, 2006: 196)、研究者が文脈上の内部者のように現場人の体験を追体験する (being there) ことは極めて重要である (Geertz, 1988=2012)。

こうして、経路依存性と経路創造とをメタ理論的に対比することにより、両理論の「二元対立」を理解することもでき、それぞれのメタ理論と研究者の立ち位置との「二面性」を究明することもできる (表1)。客観主義・決定論的な経路依存性では、経路形成プロセスは、過去に発生した出来事の積み重ね及びその積み重ねによって醸成した「自己強化メカニズム」に基づいて徐々に依存的に形成してきた歴史のプロセスである。そうした認識では、研究者は「部外者視点」(perspective of outsider) に立脚し、その歴史の流れをそのまま記述するという研究のスタンスをとる。対して、主観主義・主意主義的な経路創造では、経路形成プロセスは、過去から現在を通してさらに未来に繋げていくというような形で、主体性・再帰性を持つ現場人によって絶え間なく構築されつつある未来志向のプロセスである。その際に、研究者は「内部

者視点」(perspective of insider) に立脚し、主体性を持つ起業家たちの体験を追体験するという研究スタンスをとる。

表1 経路研究にける「二元対立」と「二面性」

		二面性 (Duality)	
		メタ理論	研究者の立ち位置
二元対立 (Dualism)	経路依存性	<ul style="list-style-type: none"> 客観主義 実証主義 決定論 	<ul style="list-style-type: none"> 人々の主体性と能動性を省く。 研究者は「部外者視点」に立って過去に発生した出来事の積み重ねをそのまま記述する。
	経路創造	<ul style="list-style-type: none"> 主観主義 解釈主義 主意主義 	<ul style="list-style-type: none"> 過去、現在、未来を繋げていく。 研究者は「内部者視点」に立って主体性・再帰性を持つ現場人の体験を追体験する。

出典：筆者作成

5. 結論と今後の発展

本稿は、経路依存性と経路創造との違いを、経路創造の重要論文である Garud & Karnøe (2001) を通じて見てきた。経路依存性では、経路形成プロセスは、過去に発生した諸々の出来事の積み重ねから人間疎外的に醸成した「自己強化メカニズム」により依存的に形成した歴史的なプロセスとみなされる。経路依存性研究では、既にロックインされている産業構造や経済構造がなぜ・どのように形成してきたかという現象に大いに注目するだろう (e.g., Sydow et al., 2021)。一方、経路創造では、経路形成プロセスは、主体性・再帰性を持つ現場人または起業家たちの能動性により新しく切り開かれ、構築されつつある未来志向のプロセスと考えられている。経路創造研究では、Spencer Silver や Steve Jobs のような主体性のある起業家たちをめぐってのストーリーが綿密に記述されていく (e.g., Garud & Karnøe, 2001)。

また、本稿は、「二元対立」となっている経路依存性と経路創造とをメタ理論とりわけ人間論に詳細に論及することにより、両理論のそれぞれのメタ理論と研究者の立ち位置との「二面性」を明らかにした。経路依存性は客観主義・決定論に暗黙的に依拠する理論である一方、経路創造は主観主義・主意主義に暗黙的に依拠する理論であるということを明確にした。方法論からみれば、決定論的経路依存性は、経路の歴史的な形成、その形成を促した疎外化した力やメカニズムを客観的に記述する研究手法をとるという「部外者視点」の理論である。一方、主意主義的経路創造は、過去から現在、そして未来を繋げていくという起業家の主体性を全面に出すため、解釈主義的なケース・スタディないしナラティブ・アプローチを通じて起業家たちの体験を追体験する研究手法をとるという「内部者視点」の理論である。

本稿のはじめにもおいても述べた通り、両理論の統合を試みた論文もあったが (Sydow et

al., 2012), それは経路依存性と経路創造との本質上の相違を把握した上での統合にはなっていない。よって、メタ理論としての存在論・認識論・人間論・方法論を詳しく議論したことに基づいての再統合を試みることを、今後の研究発展として本稿の最後に提示する。その際に、経路依存性と経路創造との「不幸な二元論」を乗り越えるために、既存の決定論を「下向き統合」、既存の主意主義を「上向き統合」として、構造と人間エージェンシーとの弁証法的な展開に関する議論 (Archer, 1995=2007; Danermark et al., 2019) は、大きな役割を果たしてくれると期待できるだろう。

参考文献

- Archer, M. S. (1995). *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐藤春吉訳 (2007) 『实在論的社会理論 形態形成論アプローチ』青木書店.)
- Arthur, W. B. (1989). Competing Technologies, Increasing Returns, and Lock-In by Historical Events. *The Economic Journal*, 99 (394), 116-131. <https://doi.org/10.2307/2234208>
- Arthur, W. B. (1990). Positive Feedbacks in the Economy. *Scientific American*, 262 (2), 92-99. <http://www.jstor.org/stable/24996687>
- Burrell, G., & Morgan, G. (1979). *Sociological Paradigm and Organizational Analysis*. Aldershot: Gower.
- Birimoglu Okuyan, C., & Begen, MA. (2022). Working from home during the COVID-19 pandemic, its effects on health, and recommendations: The pandemic and beyond. *Perspectives in Psychiatric Care*, 58 (1), 173-179. <https://doi.org/10.1111/ppc.12847>
- Danermark, B., Ekstorm, M., & Karlsson, J. Ch. (2019). *Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences*. 2nd Edition. London: Routledge.
- David, P. A. (1985). Clio and the Economics of QWERTY. *The American Economic Review*, 75 (2), 332-337. <http://www.jstor.org/stable/1805621>
- David, P. A. (2001). Path dependence, its critics and the quest for “historical economics’ economics”. In Pierre Garrouste (Eds). *Evolution and path dependence in economic ideas: Past and present*. Cheltenham: Edward Elgar. 15-40.
- Durand, R., & Vergne, J. P. (2010). The missing link between the theory and empirics of path dependence: Conceptual clarification, testability issue and methodological implications. *Journal of Management Studies*, 47 (4), 736-759. <http://doi.org/10.1111/j.1467-6486.2009.00913.x>
- Garud, R. & Karnøe, P. (2001). Path creation as a process of mindful deviation. In Garud, R. and Karnøe, P. (Eds). *Path Dependence and Path Creation*. New Jersey: Earlbaum, 1-38.
- Garud, R., Kumaraswamy, A., & Karnøe, P. (2010). Path Dependence or Path Creation?. *Journal of Management Studies*, 47 (4), 760-774. <http://doi.org/10.1111/j.1467-6486.2009.00914.x>
- Geertz, C. (1988). *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. California: Stanford University Press. (森泉弘次訳 (2012) 『文化の読み方／書き方』岩波書店.)
- Giddens, A. (1984). *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*. Cambridge: Polity Press.
- Hatch, M. J., Cunliffe, A. L. (2013). *Organization Theory: Modern, Symbolic and Postmodern Perspectives*.

- Oxford: Oxford University Press. (大月博司・日野健太・山口善昭訳 (2017) 『Hatch 組織論 三つのパースペクティブ』 同分館出版.)
- Isaacson, W. (2011). *Steve Jobs*. New York: Simon & Schuster. (井口耕二 (2011) 『スティーブ・ジョブズ I・II』 講談社.)
- Robbins, S. P. (2005). *Essentials of organizational behavior, 8th Edition*. London: Pearson Education. (高木晴夫 (2009) 『組織行動のマネジメント：入門から実践へ』 ダイアモンド社.)
- Schumpeter, J. A. (1934). *The theory of economic development*. Cambridge: Harvard University Press.
- Sydow, J., Schreyögg, G., & Koch, J. (2009). Organizational Path Dependence: Opening the Black Box. *Academy of Management Review, 34* (4), 689-709. <https://doi.org/10.5465/amr.34.4.zok689>
- Sydow, J., Windeler, A., Müller-Seitz, G., & Lange, K. (2012). Path Constitution Analysis: A Methodology for Understanding Path Dependence and Path Creation. *Business Research, 5*, 155-176. <https://doi.org/10.1007/BF03342736>
- Sydow J., & Schreyögg, G. (2013). Self-Reinforcing Processes in Organizations, Networks, and Fields — An Introduction. In Sydow J., Schreyögg G. (Eds) *Self-Reinforcing Processes in and among Organizations*. London: Palgrave Macmillan, 3-13. https://doi.org/10.1057/9780230392830_1
- Sydow, J., Schreyöegg, G., & Endo, T. (2021). Industry Dynamics and Path Dependencies: Wind Energy in Europe and Asia. In Kipping, M., Kurusawa, T., & Westney, E. (Eds). *The Oxford Handbook of Industry Dynamics*. Oxford: Oxford University Press. <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.3796074>
- Weick, K.E. (1979). *The social psychology of organizing, second edition*. Reading, Boston: Addison-Wesley. (遠田雄志訳 (1997) 『組織化の社会心理学 第2版』 文眞堂.)
- Weick, K.E. (1995). *Sensemaking in organizations*. Thousand Oaks: Sage Publications. (遠田雄志・西本直人訳 (2001) 『センスメーカー・イン・オーガニゼーションズ』 文眞堂.)
- Xia, Q. & Donzé P. Y. (2021). Surviving in a declining industry: a new entrepreneurial history of Nihonsakari since the 1970s. *Business History*. Online prepublication. <https://doi.org/10.1080/00076791.2021.1991318>
- Yin, R. K. (2003). *Case Study Research: Design and Methods*. California: SAGE Publishing.
- 入山章栄 (2019) 『世界標準の経営理論』 ダイアモンド社.
- 高橋伸夫 (2009) 「組織化とは何か？— 経営学輪講 Weick (1979) —」 『赤門マネジメント・レビュー』 8巻8号, 233-262.
- 高橋伸夫 (2012) 「殻— (7) センスメーカー —」 『赤門マネジメント・レビュー』 11巻3号, 145-172.
- 厚東偉介 (2013) 『経営哲学からの責任の研究』 文眞堂.
- 佐藤郁哉 (2006) 『フィールドワーク 増訂版 書を持って街へ出よう』 新躍社.